

1983年発行 舞台監督協会機関誌 NO.9 より

特集「劇場を考える」その一

多目的ホール その基本的なあり方 加藤義夫(建築家)

建築家の立場から

82年度に報告された多目的ホールは日本全土で650を越している。しかし一般にそれは使い難いといわれ、音響反射板が邪魔で演劇に差しつかえたり、あるいはその音響反射板が小さ過ぎてコンサートには不適であるとか、また、ひとつひとつのホールのステージの形や大きさが違って、演出に苦労が多いとかいう話が随分と言われてきた。

だが、その数の多さには驚嘆する。使い難いと言われながら、日本の津々浦々に、集会所を作るとく、多目的ホールがつくられて来た。いつか、それらは花咲く文化の温床となるかも知れない。徐々にその改善の兆しも見える。

建築設計者の教科書主義、あるいは教条主義的な融通のなさ、そして文化庁の指導がこの日本式多目的ホールを嘗々としてつくらしめているのだが、前途の非難は、使う側の無知や不勉強、あるいは努力の不足によることもある。折角の設備や装置を使おうともせずに、通り一辺の演出で通してしまう事も多いからだ。

従来の多目的ホールが改善されていく兆しというのは、叫ばれて久しかった専門劇場への視点がクローズアップされてきたということである。純然たる音楽ホールが地方に出来たり、同時に演劇専門ホールが生まれたり、さらに広島のように、全体を七つの区画に分け、それぞれに独自の専門ホールを企画するという試みがはじめられたという例もある。

なかには、欧米式の体育館を含めた、文化センターのような多目的ホールの計画もあるという。

本来、欧米で言う多目的ホールは、スポーツやイベントまでできるものであり、融通無碍、色々なものの対応可能である。そのかわり、近代設装もまた十分備えられている。音、光、雰囲気、現代技術によって最高に盛り上がるように計画されているし、大きさも区画や移動で柔軟に対応できるようになっている。

空間や形態はそれなりに洗練されているが、日本と違って、相当ラフな感じがする場合も多い。大きいし、仕上も大雑把だったりする所為である。さらにステージはアリーナやスラストが多く、プロセニウムはそれ程多くはない。つまり、多様な催しに対応できるようになっている。

欧米におけるこのような多目的ホールの所在地は、やはり、都市あるいは地域の重要拠点であり、人が集まり易く、人の出入りも簡素にできている。相当な数の人間が入場することを予定して計画しているのである。

これはホール立地の基本でもあり、その形態が都市や地域の景観に及ぼす影響に責任があるのと同レベルの問題である。

ホールが地域に及ぼす影響については十分考えておかなければならない。つまり、そのホールのファサードについてと同じく、そこで行われる興行についても地域に対して責任を負っているのである。

そこでホールを建築史的観点から簡単に見ておくことが必要となる。

古代劇場は元来、祝祭のためのものであった。従って、国家、民族、あるいはコミュニティにとって、重要なモニュメントとしての価値を持っていた。そこで楽しむ人間は、一部の特権階級に属するものに限られていたとはいえ、芸術が彼らの英知によって磨き上げられた事も、また、事実であろう。後世になり、特権的文化に代り、大衆文化が全盛する時代にいたっても、それを育むホールの存在は、やはり、地域の核であり、コミュニティをつなぐ中心として残って来た。

欧米のどんな地方都市でも、ホールができる時は大騒ぎをし、コミュニティが一体となり教会をつくるように、力を合わせて作りあげ、自分たちのものとして利用する。それによって自然にシンボリックなものが求められ、世界にアイディアを募集してつくるような事も少なくない

地域文化の形成が、ホールの誕生と同時にあるという段階に達したと考えるべきなのである。他文化との交流がそこで行われるわけだし、かつて特権階級だけが所有していた広い視野を持つ機会も生まれたわけだからである。

すぐれた出し物は、舞台さえ十分な大きさを持っていれば形式なぞには関係ない。重要なのは、むしろ建築全体の持っている質であろう。どこでも同じような意匠の近代建築である反面、その回りにはごくありふれたプレハブ・ハウスが立ち並び、似たりよったりの室内装飾をほどこした家だらけということになる。つまらない景観である。

ホールは創造がからむものであるから、刺激を与えるものであるべきである。そして多数の人間の来訪を期待するものであるから、交通の便がよく、周辺地域、あるいは、コミュニティの核となるべきである。

そういったホールに対する評価は、一般の人びとにとっても重要であるはずである。だから使う側が、観客の入りに関心を持つのと同じ位に、ホールのデザインの良し悪しに関心を示すと同時に、正しい評価を下すことができるようになれば、もっと現状打開のヒントは得られるはずである。

ホールをとり囲む環境も重要で、それによって企画者の能力を推量できるとも言える。また、アーバン・ファサードあるいはアーバン・フォルムといった建築の形も、それによって建築の質を押し量れるものである。

今、必要なことは、多目的ホールの使い難さを指摘することよりも、その地域性、またその地域性をふまえた上で生み出される建築デザイン等の評価から問題を取り上げて行くべきではあるまいか。古くて苔むしたものが一概に悪いわけではなく、そこにおいて周辺住民との交流が生まれ、ホールのロビーの片隅で商談ができるような親密性をそこに持ち得るならば、それもまた評価の対象となりうるのである。

管理面を強調するあまり、ホール自体が閉鎖的で権威的になるのが良いはずがない。いたずらにコストをかけ、設備をほこるホールつくるよりも、観客は入りやすく、雰囲気のあるホールをつくることの方が、地域にも都にも重要なのである。

以上、多目的ホールへの提言というよりは、あり方についての書き方になった。

専門ホールができる兆しはあるが、当分の間、まだ多目的ホールである。大金がかかるのだから、十分をつけねばなるまい。建築事務所がつくると使い難いといわれ、舞台関係者つくとロビーや動線がお粗末な上に意外に保守的なプランとうい批評がつく。これではイタチゴッコである。

基本としては地域文化との親密さ、あるいは、その存在による将来性が勝負であろう。そして、それはデザインとして評価できるものであるべきだ。そんな気がする。

* 1983年発行の舞台監督協会機関誌 NO.9より原文のまま転載致しました。無断転載、使用は禁止です。